

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成23年度派遣報告書

——インドネシア共和国・ハサヌディン大学・インドネシア語、
派遣期間 (H23. 9. 9-H24. 1. 20)——

平成23年入学

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

博士課程 1 回生

張雅文

自身の研究テーマについて

中国国営企業もしくは国有企業の海外への進出、特に第三世界への進出は 90 年代後期から始まりました。今までの研究は、それらの国営や国有企業に集中していました。一方、インドネシアの電力業界では、2005 年以降、中国企業の存在感が急速に膨張していることに注目が集まりました。その原因は、民間電力企業の本格的な海外進出であります。本研究は中国民間電力企業に焦点を当たり、インドネシアと中国で総計 10 社にヒアリング調査を行いました。そして、その中からの 2 社、「青島捷能パワーステーションエンジニアリング株式会社」と「武漢洪山電気技術株式会社」の対インドネシア進出の事例をケーススタディとして取り上げようと思います。

何故 2005 年から中国民間電力企業は本格的に海外進出を始めたのか、何故インドネシアなのか、どのような形でインドネシアの電力業界に動いているのか、また、どのような課題を持っているのかを明らかにしたいと思います。また、多国籍企業論の一般論と違い、中国国営や国有企業に対する研究とも異なる独特の多国籍企業の道を歩むのかを論理的に分析しようと思います。

研究言語の概要

インドネシア共和国の共通語であるインドネシア語は、マレー語の一方言から派生した。約 3 千万人がインドネシア語を第一言語、さらに 1 億 4 千万人が第二言語として使っている。

インドネシア語はローマ字で書かれている。アルファベットごとに発音が付いている。たとえば、<c>は /tʃ/ (英語の <ch> と同じ)、<j>は英語と同じように /dʒ/ と発音する。

インドネシア社会のグローバル化とともに、数多くの外来語が日常会話で頻繁に使えるようになった。たとえば英語の“information”はインドネシア語で“keterangan”と言うのが、現在、“informasi”の方がよく使われている。

語学研修の内容について

ハサヌディン大学は外国人留学向けのインドネシア語授業がない故、私は東南研により設置された現地のフィールド・ステーションスタッフに語学の指導を依頼し、個人レッスンを受けた。スタッフさんと一緒に、三日間の珊瑚に関する国際セミナーと十日間の環境に関するセミナーに参加した。自分の専門とは関係ないが、たくさんの方々と知り合い、インドネシア語の会話練習ができた上、ネットワークも広がった。

調査地は首都のジャカルタにあるので、4ヶ月間のうち3ヶ月間はジャカルタに滞在した。そこで言語教育専門の先生と出会い、先生に作成してくれたスケジュールに従い、インドネシア語の指導を受けた。また、中国語を学びたいアタマ・ジャヤ大学の学生にボランティアで中国語を教えました。それはインドネシア語練習のいい機会にもなった。

研修期間中に印象に残った体験や経験

インドネシア語が中国語、英語、日本語と比べると簡単とは言えるのが、私から見れば、最初にちゃんと言語教育の先生に指導してもらう方が上達しやすいと思う。ハサヌディン大学でネイティブの方により言語レッスンを受けたのが、「なぜ」に答えられない場合が多かった。

基本的なルールをマスターした後、一番大事なのは単語の量だと実感した。自分は単語の学習に関してはあまり得意ではないので、先生に相談した結果、毎日単語を覚えさせるための宿題をくれるようになった。

目標達成度や反省点について

単語の学習が不得意という自分の弱点に対して、もっと努力すべきだというのは今回の反省点の一つである。

ジャカルタ人口の中、かなり多い人数はある程度の英語を話せる。ジャカルタに滞在する期間中、つい気を抜き英語で自分の言いたいことを言うことになったことが多かった。それが今回一番大きな反省点であった。